

書

イザベラ・バード著、金坂清則編訳『イザベラ・バード極東の旅1』

平凡社（東洋文庫743），2005年6月，

A6版，259頁（写真123），2,400円，

同『イザベラ・バード極東の旅2』

平凡社（東洋文庫743），2005年10月，

A6版，448頁（写真55，図2），3,000円

旅行記の翻訳は本来こうあるべきであろう。このほど、金坂清則氏による『イザベラ・バード極東の旅1』（2005.6），『イザベラ・バード極東の旅2』（2005.10）が出版された。金坂氏のイザベラ・バード翻訳本『中国奥地紀行1』（2002），『中国奥地紀行2』（2003）に続く第3，4冊目の訳本である。

こうあるべき，というのは，訳者の「旅を旅する」（ツイン・タイム・トラベル）という姿勢である。イザベラ・バードが旅をしたルートを金坂氏自身がプロ級の腕前で写真を取りつつ追体験していることである。バードが撮影した写真はそれだけで歴史的に価値があるのだが，それに対する注記が不備であった点を不満として，氏が詳細な訳注を入れている（『極東の旅1』，215-250）。『中国写真集』についての最初の一文を紹介しておこう。「現地調査の結果，この写真は，正陽門の東西に延びていた城壁の上，同門の東約五〇メートル付近で撮影されたことがわかる。中央の建物とは天安門であり，……現在はこの地点に毛沢東記念堂が建っている。……」バードの目線で当時の写真を分析すると共に，現況を活写することによって読者に歴史的変遷を語るという優れた訳注になっている。

『極東の旅』の第1章にあたる「I アジアへのまなざし—旅の成果としての写真集」は第1巻に収められており，第2巻は「II 旅の実際を語る」，「III キリスト教伝道活動をめぐって」，「IV アジア旅行家の第一人者として」，の3章からなっている。

さて，以下において両書の章構成順にその概要を紹介するという方法をとらず，（1）バードの現地の人々に対するイメージと実感，（2）この書物の活用法，（3）訳者への要望という3部構成で語ってみたい。

評

（1）バードの現地の人々に対するイメージと実感

最初に読んだとき，「II 旅の実際を語る」の冒頭で「朝鮮は私がこれまで旅をしてきた国の中では一番興味をひかれない国ですし，国民は人種のくずのように思われます。……中国はもっとひどく，そのひどさは底無しです」に目をおおった。こうした文言は，現在なら，だれが発言しても，とくに要職に付いている人ならなおさらであるが，国際的な大問題に発展する発言である。金坂氏は訳にあったて「本書には，今日からみて人権上問題のある差別的な表現が含まれるが，作品の歴史的意義にかんがみ，原文に基づいて訳出した」と断っておられる。いくら訳とはいっても苦慮されたことと思う。

バードは実際の道中で関わった人々に対しても辛辣なことばをあびせている。例えば曳夫について「曳夫はおそらく中国で最も粗野な階級に属している。その仕事は『非人間的』で残酷なためであるが，……」（『中国奥地紀行1』231頁）のたぐいである。また，写真付きであるが故に印象に残っているのだが，瀕死の苦力に対して次のように記述している。「病人や瀕死の人に対し，個人として親切で，その世話をするということは中国人には見られない。もしある人物が重病でもはや役に立たないならば，なぜそんな人物に時間と手間をかけるのか，無駄ではないかというわけである。写真の苦力はビショップ夫人（バードのこと：評者注）を運んでいた苦力の一人であり，途中で病に倒れたのだが，何日にもわたって仲間と一緒に仕事をしてきたにもかかわらず，病気になったとき，だれもその世話をしなかった。そしてビショップ夫人が『もはや役に立たない』この男の熱い額に濡らしたハンカチを当ててやると，彼女をあざけり笑うのであった」（『イザベラ・バード極東の旅1』86，87頁）。

かつて，レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』（中央公論社，1977）を読んだとき，これほどアジアの人々を蔑視した表現を使わなくてもいいのに，と思ったことがある。バードの紀行文を一読したときの印象も全く同じであった。ただ，100年も前，しかも女性という身で，道中幾度と

なく危険なめに会い、重傷も負っている。まさに命がけの旅であった。それゆえに現地人に対する印象はいきおい厳しくなっても当然であり、それは許されるであろう。しかし、同じアジア人として、かつアジアを旅することの多い評者にとって、決して好意をもって読める内容ではなかった。

しかし、この度書評をするという機会を得て、再読すると、読後感は一変した。前引用文で、「非人間的で残酷なためであるが、」に続いて「それにもかかわらず、彼らは彼らなりには気立てのよい人たちである。暴力沙汰はめったに起こさず、大変陽気で、よくふざけ、よく騒ぐ。外国人のまねがうまく、冗談が好きで、ユーモアのセンスにもあふれている」とフォローしている。あらゆる場面でそうである。だからこそ、何度も彼女は極東の旅をしつづけたのであろう。

『極東の旅2』のメインは「Ⅲ キリスト教伝道活動をめぐって」、であって、彼女が何度も異国の地を訪ね続けたことの背景には「これらの人々をキリストに帰依するように仕向ける仕事に喜んで尽くそう、この仕事こそは神が私にお与えになった仕事である」(128頁)という使命感があったことがわかる。だが使命感だけでは彼女を極東の旅へひきつけはしなかったであろう。彼女は旅を重ねるにつれて極東の人々の優しさを感じ取っていったのである。西洋にない素晴らしささえ学んでいく。「未開人」を意味する蛮子(マンツ)という言葉を使いつつも「蛮子の生活の注目すべき特徴の一つに女性の地位がある。女性は男性と対等であるにとどまらず、男性からかなり丁重に扱われるし、男性の興味の対象や楽しみをどこであれ共有する。男性と女性はいつも区別しては見られない」、さらに、「彼らの視野は狭く、考えは保守的である。初歩的な知識さえ極めて乏しい」と言いつつも、「彼らは、客を温かく迎えてくれ、友好的で礼儀正しく、好奇心をあらわにせず、道徳に寛大で、一緒になって目一杯陽気に浮かれ騒ぎ、並外れて愛情のこまやかな人々である」(228頁)と述べる。

あれほどけなした朝鮮の人々に対しても「内陸部を二カ月にわたって旅する中で、私は朝鮮の自然が秘めたすばらしい可能性に強く印象づけられてきた。気候は大変良く、降水量が多く、土壌は非常に肥沃である。それで、農業自体はきわめて

遅れているのに、この上なく豊かな実りがあるのである。一四〇〇万人の国民は、現在の運命や訪れるであろう将来の運命よりももっとよい運命をもつに値する人々である」(239頁)と絶賛している。バード自身、旅をしながら成長していると思った。

金坂氏が唱えたツイン・タイム・トラベルを実践できなかったものの、ツイン・タイム・リーディングしてはじめて、バード極東の旅の紀行文には「優しさがあった」ことが理解できた。

(2) 本書(前2冊も含む)の活用法

第Ⅱ章の「旅の実際を語る」で、現在でも役にたつ「旅の秘訣」を学ぶことができる。「私も従者たちも発熱したり風土病に罹ったりすることはまったくありませんでした。探検旅行をする人たちに同道しましたときに【彼らが】病気になって進行が遅れたことは何度かありましたが、私や従者たちが衰弱して遅れるというケースは皆無でした」(123頁)といいきれだけの準備と秘訣が詳細に書かれている。評者はインド・バングラデシュを旅するたびに吐いたり熱を出したりを繰り返してきただけに、学ぶところが多かった。

あまりにも凝った旅支度をする宣教師に対して「彼らがもし住んでいる国のやり方を少しでも採用したり、現地の人々から少しでも学びさえするのなら、もっと健康的で益することの多い暮らしができ、しかも出費も最小限に抑えられるでしょうに」(125頁)と苦言を呈している。これから海外でフィールドワークしようとする読者にとって、傾聴に値する心得であろう。

バードが旅行中に会った人々に対して、前述のように、かくも叩きかつ讀えたか、その基は「写真」にあらう。彼女の写真撮影に対する執心は並大抵のものではなく、いかなる奥地へも重量のある機材を持ち込んで丁寧に撮影している。数多くの写真がおさめられているところが彼女の紀行文の特色であるが、単なる写真集ではなく、それ以上に写実的な観察力と文章力に迫力がある。それゆえに地理、歴史、政治、民俗、交通、建築、植生、等々のいかなる分野に関心がある人に対しても飽きさせない魅力を持っている。旅行記であるから同行の人々との苦楽を中心に語っていくのであるが、これはと思う事象に出会うと、それに対して徹底的に調べ上げ解説していく。そ

ここに西洋人としての価値観が反映され、かつ女性としての感性が余すところなく示されている。これから紀行文を書こうという人、地域を記述しようという人にとって格好のテキストとなろう。

(3) 訳者への要望

『極東の旅2』の文体は「です、ます」調の女性らしいことばで訳されており、バードの語りをそのまま聞いているようで非常に読みやすかった。その中であって「Ⅱ-3『日本奥地紀行』新版序文と写真」および「Ⅳアジア旅行家の第一人者として」の「2朝鮮」以降が「である」調になっている。統一して訳された方がよかったのでは、と思った。という軽い感想はさておき、訳者

に強く要望したいのは、氏自身にツイン・タイム・トラベルの成果を一冊の書としてまとめてほしいという願いである。

バードの足跡を追って撮影された金坂氏の写真展覧会が日本と英国において好評であったとお聞きしている。その写真を使つてのイザベラ・バード論を展開してほしいと思う。本書『イザベラ・バード極東の旅2』は、すでに訳書の域を通り越して、その詳細で膨大な訳注が示すように金坂清則著『イザベラ・バード論』になっている。バードの写真と金坂氏の写真が競演している極東の旅の風景を見たいものである。

(溝口常俊)